

白川恵子著

『抵抗者の物語——初期アメリカの国家形成と犯罪者の無意識』
小鳥遊書房 (2019)

峯 真依子

この本は忘れ去られた作品や、テキストになってはいないが確実に存在し、人々の営為に影響を与えてきた言説、いわば稗史^{はいし}を扱っている。メジャーな作品の文学評論を講じたとしても力強い著作となったであろうが、これまで人種にまつわる様々な文学評論で優れた業績をあげてきた白川恵子氏が着目したのは、市井の人々の物語——それは、マイナーな本だけでなく、ときに硬貨にまつわる物語であったりもする——であり、また地道な分析を経て、痛快かつ硬派な著作となった。本を開くと1章から10章まで、あまりにも豊かな題材が色とりどりに並んでおり、それだけでもスリリングである。

本著全体を透徹する視点は、大きくいえば二つある。まず、体制転覆的革命行為の独立戦争が愛国的行為に読み替えられていったアメリカ建国の経緯に象徴されるように（本書では第1章で詳細に扱われている）、宗主国に蹂躪されてきた植民地の被抑圧者たちは、たとえそれが犯罪行為であっても自分たちにとっては正義であり、また不道徳だったとしても実は道徳的行為なのであるという撞着語的概念を弁別不能な状態で混在させていた、という視点である。そこには、ある国家の行為が別の国家にとっては犯罪であっても、自国内では犯罪にならないというように、常にある行為の意味はそれがいかにナラティブ化されるかにかかっている、実はきわめてフィクショナルな側面があることがうかがえる。

初期アメリカの被抑圧者たちの抵抗精神と犯罪行為が、抑圧者に対して同時に提示される時、自らの反抗・犯行は正義だという自意識を補強するナラティブが形成される過程で英雄像が作られ、また期せずして英雄は反英雄をも生み出してしまう。この堂々巡りのような、抑圧と被抑圧の在り方が絶

えず入れ替わっていく人々のせめぎ合いを、筆者は鮮やかに描きだしている（余談かもしれないが、アメリカン・ヒーローの伝統と系譜についての研究はこれまでにいくつかあるが、再生産され続けるその存在のリアリティは犯行を正義と苦し紛れに言わねばならなかった建国時に帰するものだったのかと、この本を読みながら改めて強く認識させられた）。

また、そこに生きた「市井の人の反骨や苦悩や逡巡が、物語となりうる」ことを、様々な題材をもって実証していくアプローチは、清濁併せ持つ普通の人々の、ときに恥ずかしい、格好悪い行為さえも容赦なく読者に提示してくれる。その切り口は、大変小気味良い。面白かった箇所はいくつも挙げられるが、個人的にはまず、「政治的な愛の粉」(p. 45) というくだりで思わず噴き出してしまった（ぜひ読んでいただきたい。爆笑すること請け合いである）。一方で本書では、図版が多く用いられているが、グロテスクなものをあからさまにグロテスクだとは言わず、しかし読者にさりげなくそうだと気づかせる、抑制されているが心に迫ってくるようなトーンもある。

さて、二つめの視点は、文書や文字化されたテキストが生きており、常に変容するという視点である。その良き例として合衆国憲法を挙げ、それが欠陥や矛盾、あからさまな差別を含んでいたような最初から不完全なものであったが、修正を続けるがゆえに、常に変容する性質をもつという。そしてここがポイントなのであるが、メインのテキスト（正史）の修正には、弛まぬカウンターテキスト（稗史）による挑戦がある、という事実である。それがよく描かれているのは、とくに第9章アリス・ランダル『風は去っちゃまった』とマーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』。また、第10章マット・ジョンソンの『ピム』とエドガー・アラン・ポウ『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』のそれぞれの考察においてである。メインとカウンターが複合的重層性を再生しつづけるテキストのあり様が、文学が書かれた時点で完成するのではなく、人々の生きざまを吸収し続ける生きた芸術形態であることを読者に気づかせる。

ただ、ひとつ気になった点を挙げれば、副題の「犯罪者の無意識」についてである。これは、犯罪をおかしたか、これからおかしかねない者のある種

の心の在り方のことなのだと推察されるが、この用語の厳密な説明が、もう少しあれば良かったのではないかと思う。フレドリック・ジェイムソンの「政治的無意識」を援用したと思われる「犯罪者の無意識」については、ジェイムソンの「政治的無意識」が序章での短い言及に留められているため、著者とジェイムソン両者の用語の連関性についての手掛かりがいま一つ乏しい。章を読み進めるごとに、「犯罪者の無意識」の本著における明確な定義を知るべく、文脈からその都度拾って、どのような使われ方をしているのかを確かめる必要が生じる。正直に言えば、論者には最後までそれを理解できたという確信が得られなかった。

もっとも、「……アメリカの抵抗者のなかには正義の意識が、英雄の側には犯罪者の無意識が——あるいは、双方ともに逆の無意識が——さらに場合によっては、相矛盾しつつも受容されていく潜在意識が——刷り込まれていたと考えられるだろう」(p. 17)とあるように、「犯罪者の無意識」の適応範囲を広げつつ、この無意識もしくは意識を持つ主体を安易に固定しないことが筆者の意図であったならば、その意図は十分に成功しているとも言えよう。

責任を問われれば合法だったと答え、侵略を解放と言い換える。そして初めから戦う術を持たなかった誰かの痛みは、初めから無かったこととなる。そんな事象はわれわれのすぐそばに、そして歴史上にいくらかでもある。文学者として著者が成し遂げた様々なナラティブを解説する術を、この本を通じてわれわれ読者が追体験できたからこそ得られる多層的な物の見方は、そういったAという事象を反Aにすり替えようとする、誰かの試みに鋭敏に気づくことを可能とする。

ゆえにこの本を手にする読者層は、初期アメリカの時代と文学を研究する者だけに決して限定されるべきでない。権威ある言説と「取るに足らない」と思われてきた言説の間で探求しようとする真実への信頼と、それを見出すために身に付けるべき多くの普遍的な技術が、この本には惜しみなく詰まっているからである。